



主日礼拝説教 — 2016年5月22日

イエス様は真の礼拝を切望しておられる

聖書 ヨハネによる福音書 2章12～17節
マラキ書 3章1～5節

武田 真治

1、教区総会開会礼拝の聖餐にて

昨週、この西中国教区の年に一度の総会がありました。総会は、開会礼拝をもって始まります。その中で必ず教区内の教会の一致の印として聖餐が持たれます。ただ、聖餐を司式された牧師は、聖餐制定の言葉の中で「罪」とある箇所をわざと「弱さ」と変えて読んでいました（後で質問しましたら、教団の式文でなく個人的に作成したそうです）。ことの重大さを本人は認識しておられないのでしょうか大きな問題です。

なぜなら、「弱さ」はその人の努力や頑張りでなんとか克服出来てしまいます。それを「罪」だと言い換えてしまえば、人の罪も自分の努力や頑張りで克服できるということになってしまいます。それでは聖書が言うところの「罪」とは違います。「罪」は神様によって「清められる」ものだからです。もし、人の努力で「罪」を完全に取り除くことができるなら、神様は必要ないということになります。神様による罪の赦しを表す主の十字架を指し示すものが聖餐（＝キリストの血と体）です。その聖餐式に於いて「罪」を「弱さ」と言ってしまうことがどんなに愚かなことか。しかも、その先生は良いことをしていると思っておられる、それをパウロ主義批判と思い込んでおられる、イエス様ご自身が「私は罪人を救うために来た」と仰っておられるのに。暗澹たる思いになりました。イエス様は弱い者のそばにいて下さる、どこまでも優しいというだけのお方なのでしょうか。

2、いきなり「宮清め」？

「ヨハネによる福音書」は、2章からイエス様の具体的な活動や伝道を記しています。最初は「カナの婚礼での奇跡」でしたが、その奇跡は身近にいた人たちだけに分かったものであり公の活動とは言えませんでした。公衆の面前に自らの姿や意思を示された行動は次の（今日の聖書箇所である）「神殿から商人を追い出す」です。いわゆる「宮清め」と呼ばれている行動です。

おそらくお気づきになったと思いますが、他の福音書ではもっとずっと後の方にこの「宮清め」は出て来ます。イエス様が最後にエルサレムの都に入られてから為される行動です。しかし、「ヨハネによる福音書」の場合、いきなり最初にエルサレムに入られて「宮清め」を為されたと記しています。どっちが本当だったのかと思わされます。どうしてこうなっているのでしょうか？

その答えは21節にあります。即ち「イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉とを信じた」と。福音書とはイエス様のご生涯を順番に記して行く書物なのに、いきなりイエス様が「死ぬ」こと、そし





てその後「復活される」ことを最初から記しています。いわばこの書の結論を先に言ってしまっていることとなります。逆に言えば、この書を読む人たちは既にイエス様の死と復活についてよく知っており、弟子たちのその後も知っている人たちであり、それを前提にしながら、もう一度改めて、イエス様のご生涯は、この地上に残された我々にとってどのような意味があったのだろうか、何が本当に大切であったのだろうかと問い直すために書かれているのです。そのような視点からイエス様のご生涯を見直した時に、ヨハネはこの「宮清め」の行為こそイエス様が何より人々に対して問い掛けられたことと見做したのでしょう。故に、何より先にこの行動を記したのではないかと考えられます。これこそイエス様が為さりたいかった事であり、それは「宮清め」つまり「礼拝の改革」であったのだと。

今日はもう一箇所、旧約の「マラキ書」3章を読んで頂きました。そこに「あなたたちが待望している主は突如、その聖所に来られる。(中略)裁きのために、わたしはあなたたちに近づき直ちに告発する。呪術を行う者、姦淫をする者、偽って誓う者(中略)わたしを恐れぬ者らを、と万軍の主は言われる。」とあります。まさに、ここでのイエス様の姿を預言している言葉ではないでしょうか。そして最も罪が重いとされている者は、最後に挙げられている「わたしを恐れぬ者ら」なのです。エルサレム神殿を商売をする場所になっている、しかも、これこそ聖なる牛だ、聖なる羊だと巡礼者を騙して高額な献げものとして売りつけ、神殿の中だけで通用するお金と高額な両替料を取る者たちと、その商人たちから場所代や税金を徴収して私腹を肥やしている祭司たちのあり様は、まさに「わたし(=神様)を恐れぬ者ら」でした。そのような態度はイエス様も許されない、力をもって神殿の「境内から追い出された」のでした。敢えて、人々への見せしめとして厳しい形で。

ある解説者によれば、この福音書が書かれた時代、律法主義で厳格なユダヤ教からキリスト教に変わったことにより、やりたいように生きる、何でもありのクリスチャンが現れていたと。そこではイエス様が何でも許してもらえるお方と考えられていたと(まさに最初に紹介した現況と同じではないでしょうか?)。そのような風潮に対して、ヨハネは、敢えて厳しく怒るイエス様を最初に記したのだという説です。

このようなイエス様の姿は、神様や信仰を侮ることに對しては断固、その罪を告発され、戦われることを表しています。その点に於いて、今の私たちに対しても同じように振舞われるのではないのでしょうか? もし私たちの礼拝が真に神様への献身の思いに裏打ちされていないのなら、主は宮清めを私たちにも施されることでしょう。

3、戒められても、離れられない罪

このような思い切った行動は、イエス様も覚悟を持って為されたと思います。もしこの行為でエルサレム神殿の当局者や祭司達が悔い改めて、これからは神殿を商売の場所とせず、真の礼拝を目指すように改革して行ったならば、きっとイエス様はこの神殿での礼拝を良しとされたでしょうし、もしかしたら、新しくキリスト教を生み出さずに済まされたかも知れません。しかし、そうはなりません。この神殿改革を維持するためにはずっと神殿の中にイエス様が居て不正が行われないように見張っていなければいけませんでした。けれど、きっと、神殿の関係者はこんなことをしたイエス様の方を神殿から追い出し、二度とイエス様が神殿の中に入ら





ないように阻止したでしょう。そして、次の日には商人達がまた神殿に入って来て商売を始めたでしょう。お金が儲けられる利権を人々が簡単に手放すはずがないからです。そうなることはイエス様があらかじめ分らないはずはないように思います。それでもなお、この宮清めを為さったのは、もしかしたらユダヤ教の当局者が自分の行動で、自ら非を認めて悔い改めてくれるかもしれないと、敢えて怒りを表に出すことでこのことの問題の重大さを分かってもらえるかもしれないと、そう切に願いながら為されたと思います。

しかし、ユダヤ人達の中に悔い改めは起こりませんでした。逆に「あなたは、こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せるつもりか」とイエス様に食って掛かったのです。自分達の問題性を認めないばかりか、何の権利があってこんなことをするのかとイエス様を批判している、自分達の権威が脅かされるとしか考えないで他者を批判する姿は、あのエデンの園で自己保身だけに走るアダムの姿に通じます。人間の持つ、根深い罪を感じます。

4、十字架への道の第一歩として

このユダヤ人達の答えを聞かれてイエス様は「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」と仰いました。その言葉を聞いたヨハネは「イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである」と語っています。つまりイエス様の十字架と復活を指しているということでしょう。

おそらく、ここまで思い切った行動に移されても通じない状態を目の当たりにされて、イエス様はいよいよ真に人を救うためには十字架しかないのだと、そして新しい信仰の群れを創り出すしかないのだと思いを定められたのではないかと思います。この根深い人間の罪の問題を根本的に解決しなければ、人が真に神様に向かう道は開かれないのだと思われ、十字架への道を歩み始められたのでした。その第一歩がこの「宮清め」であったのでした。

実はこの「宮清め」がイエス様の十字架への直接的な第一歩であったという点は、他の三つの福音書でも同じです。この行為が十字架刑の直接の理由でもありました。むしろ「ヨハネによる福音書」は、「宮清め」を最初に持って来ることによってイエス様が最初から十字架への道を歩んでおられたことを示したかったのではないかと私は思います。

私達の礼拝を神様に喜ばれるものにしたいという努力は一方で限界があります。これが完全な礼拝だと言うことは、人間の傲慢、罪でもあります。あくまで私たちの努力は限界があるのです。だからこそ、その罪の赦しを主に願いながら、み言葉と聖礼典による「罪の清め」に与って行くことを何より求めて生きていく者でありたいと思うのです。

(主日礼拝説教より抜粋)

